

「融氷の旅」の3つの記録

昨年10月の安倍晋三首相の訪中を「破氷の旅」と呼んだのになぞらえて、温家宝首相は今回の訪日をもみずから「融氷の旅」と表現した。みづこ

なキャッチワードである。氏の温和な風貌と重ね合わせ、これで長い日中の冷却期間も終わったかのように感じた人も多かる。温首相の国会演説に「感動」を隠せなかった国会議員が与党の大幹部の中にもいたようである。

しかし、国会演説、首脳会談、共同プレス発表の3つの記録を仔細に読んでみれば、中国の対日政策の基本は何ひとつ変わってはいないことに気づく。表現が従来のものより多少和らいだというだけである。基本は何も変化していないのに、これが変化したかのように受け取って対中外交に臨めば手ひどいしっぺ返しを食らうのは日本である。

中国側の対応の中で象徴的な2つの問題に絞って記述しておこう。一つは、東シナ海ガス田問題であり、もう一つは、国連改革問題である。い

ずれも首脳会談のキーワードである「戦略的互恵」の中核に位置するテーマである。前者については共同プレス発表では「双方が受け入れ可能な比較的広い海域で共同開発を行う」と記された。これが

「合意」といえるか。実際、中国外交部は首脳会談とプレス発表のあった日の翌12日の北京での定例記者会見で、中国の海洋権益が及ぶ範囲は沖縄トラフまであり、日本側が提示する中間線が日中を分けるという解釈は採用しないと改めて主張した。

しかも、11日には「白樺」(中国名「春曉」)に加えて「樺」(中国名「天外天」)で中国海洋石油(CNOOC)がガス生産を開始したと発表し、定例記者会見では「個々の企業の具体的な活動状況は把握していないが、主権にもとづく正当な活動だ」といった趣旨のことを平然と述べた。地下構造が中間線にまたがっている可能性がある

ために、開発中止を日本側が再三にわたって求めていたにもかかわらずである。

国連改革についての合意 同時期に東京と北京でまったく異なる対日対応が主張さ

がある。これを単なる「風説」に終わらせずに、利権構造の内実を鋭利に分析しておかねば、次官級協議をいくら重ねても容易に解決の道を探り当てることはできない。

国連改革問題についての共

こと。この反日暴動によって受けた大使館、総領事館の被害に対して謝罪と賠償を求めた日本政府への対応が、反日暴動の責任は中国側にはない。中国人民の神経を逆撫でする基本的問題についての日

温家宝首相の微笑の裏に何があるか

論



拓殖大学学長 渡辺 利夫

れたのである。どこに戦略的「互恵」が宿っているというのか。微笑外交で実を採るといのが中国側の「戦略的互恵」といふことか。このところを厳しく突けない日本外交も情けないではないか。東シナ海のガス田開発は人民解放軍の権益に属し、外交部はさしたる発言権をもっていないというウォッチャーの観察

同プレス発表は「中国は日本が国際社会で一層大きな役割を演じることを希望する」と踏み込んだ表現を用いた。しかしこの「合意」を信じるほど日本人もナイーブではない。一昨年春の北京、上海における反日暴動が日本の国連常任理事国入りを阻止する中国政府の意向を体して膨れ上がった「官製」デモであった

本政府の不誠実に責任のすべがある」といふのが、いまなお変わらぬ中国政府の公式の態度である。このことを日本側が忘れていたのでは愚かというよりほかない。

天皇訪中要請と靖国問題 もう一点、主張しておきたいことがある。今回の温首相の微笑外交は、これによって

日本国民の中に広がっている中国脅威論や反中感情を「慰撫」し、首相の靖国参拝阻止を狙うという戦略的な一面がある。事実、首脳会談において安倍首相が年内訪中を口にし、同時に胡錦濤国家主席の訪日を要請した。そのうえ温首相は皇居で天皇陛下の北京オリンピック開会式への出席を要請した。年内に安倍首相が訪中し、年が明けて胡主席が訪日し、次いで天皇陛下までが訪中ということになれば、この間に日本の首相が靖国神社を参拝した場合、日中首脳交流の「中絶」を中国側が主張する口実を得ることになる。

靖国参拝などは元来が日本の内政問題であり、これを外交問題に仕立てたのは中国政府の「狡知」以外の何ものでもない。この問題での日本側の後退は、日本人の深層部に眠るナショナリズムの情念をかき立て、日中関係を修復不能な事態に立ちいらせてしまいかねない。中国の狡知に負けぬ強靱な外交力を日本は錬磨しなければならぬのである。(わたなべ としお)

ガス田開発など中国の姿勢変化なし

日本国民の中に広がっている中国脅威論や反中感情を「慰撫」し、首相の靖国参拝阻止を狙うという戦略的な一面がある。事実、首脳会談において安倍首相が年内訪中を口にし、同時に胡錦濤国家主席の訪日を要請した。そのうえ温首相は皇居で天皇陛下の北京オリンピック開会式への出席を要請した。年内に安倍首相が訪中し、年が明けて胡主席が訪日し、次いで天皇陛下までが訪中ということになれば、この間に日本の首相が靖国神社を参拝した場合、日中首脳交流の「中絶」を中国側が主張する口実を得ることになる。